

ウェーバーのクラリネット室内楽

本プログラムには、ウェーバーと当時の名クラリネット奏者ハインリヒ・ベールマンとの友情から生まれた『傑作室内楽』が並んでいる。

歌劇《魔弾の射手》序曲

ウェーバーと言えば、歌劇《魔弾の射手》だが、この序曲の編曲版では、オーケストラが奏でるドラマを、クラリネットが主導的に表現する。冒頭の神秘的な森の情景から一転、ヒロインのアガーテを活写する清らかなテーマを、クラリネットがたっぷりと歌い上げる。そして、最後の歓喜が爆発するコーダでは、クラリネットが高音域を駆使して、勝利のファンファーレを高らかに響かせる。

歌劇《ジルヴアーナ》の主題による変奏曲

オペラ・アリアをもとにしたこの曲では、クラリネットがプリマドンナの役割を担う。主題提示部では、プレスの技術を駆使した、滑らかで艶のあるレガート奏法が堪能できる。変奏が進むにつれ、細かい音符が歌手のコロラトゥーラのように絡みつく。特に、低音域から高音域までを一気に駆け上がるスケールは、クラリネットの音域を示す聴きどころ。

協奏の大二重奏曲

「協奏的（コンチェルタンテ）」とある通り、ピアノ伴奏による「クラリネット協奏曲」に近い。ピアノの重厚な和音に負けないよう、クラリネットには格段の力強さが求められる。全3楽章構成で、「第1楽章：Allegro con fuoco」は、ソナタ形式で書かれた、情熱的な勢いのある楽章。ピアノ伴奏に乗って登場する冒頭では、オペラのような歌心あふれる旋律と超絶技巧が交互に現れる。「第2楽章：Andante con moto」は、憂いを含んだ抒情的な楽章。クラリネットの豊かな音色・色彩・ダイナミクスを活かした対話が繰り広げられる。終楽章の「第3楽章：Rondo: Allegro」は、輝かしいフィナーレに向けて、両楽器が複雑なリズムや急速なパッセージを交わしながら軽快かつエネルギーに突き進む。

舞踏への勧誘

冒頭の序奏部分では、重厚な低音域と繊細な中音域を一本のクラリネットが巧みに吹き分ける。ワルツ本編に入ると、クラリネットはクルクルと回るダンサーのように、軽快な連符を吹き続ける。タンギングの軽やかさがステップの軽快さを生み出し、優雅なワルツを彷彿とさせる。

クラリネット五重奏曲

モーツアルト、ブラームスと並び称される、クラリネット五重奏曲の傑作。「クラリネット×弦楽四重奏」という『協奏的』スタイルで書かれている。全4楽章構成で、「第1楽章：Allegro」は、ドラマチックなソナタ形式で始まる。独奏楽器の華やかな技巧が際立ち、オペラのような劇的な性格を持っている。「幻想曲」と題された「第2楽章」は、オペラのアリアを思わせる叙情的で深い感情表現が特徴。3オクターブにおよぶ広い音域や跳躍、繊細な半音階のスケールなど、高度なコントロールが要求される。「第3楽章」は「メヌエット」という名称だが、楽譜には「カプリッチョ（狂想曲）」の指定があり、スケルツォのような軽快で遊び心のある性格を持っている。「第4楽章」は「陽気な」と記されたロンド形式のフィナーレ。疾走感あふれる活発な主題と、クラリネットの超絶技巧を駆使した、火花を散らすような華やかな終結部が聴きどころ。